

生活介護での集団生活と、活動中での関わりの難しさ

在宅支援課

生活介護事業 おおぞら

多機能型通所施設 大地

地域共同作業所 らふ

駒井 義紀

1. はじめに

生活介護事業では成人（18歳以上）を対象に在宅生活を支援していくと共に、身体機能や精神的な支援を中心にいき本人のQOLを維持していき、地域での生活に根付いて行ける様、又、ご家族の介護負担が軽減される様相談・アドバイス等を専門職として支援を行っている。

集団生活で関わる中で、個別性を活かしながら支援を行う難しさについて、事例を用いて報告を行った。

2. 集団活動での実際

おおぞらと大地の違いとしては、大地での小集団の療育活動で、発達状況の把握と共に表現方法を引き出し、大きな集団に入っても意図的に自己主張が出来るように支援している。

実際に集団活動中、表現方法に問題がある方が多く、傾眠・不穏など別の形で主張されることが多くあり、日々変化してく状況に分析や行動パターンなど把握し検討している。

集団の中で個別性を活かす為には、グループ分けにも配慮し、尚且つ苦手な活動の中でどう自分をアピールし訴えを発信することが出来るか、それを汲み取る職員の質も問われる中で活動を展開している。苦手な活動中でも五感をつかいその中で一つでも楽しみを見つけ参加して頂くことも必要と思われる。

一つの例として、レクリエーションや作業等の活動では（聴覚・視覚・触覚）が中心となっているが、重度心身障がい利用者に関しては触覚的な経験が少ない為に、嫌がる方も多く、握る・触る事への拒否もある。その中で聴覚的な音を取り入れることで、気持ち的に安心感が得られ、楽し

んで参加できる例もあった。全てに当てはまる訳ではないが、実践の中で個別性を問われた際に、一つの楽しみがあれば苦手な事も分散され参加できることがわかった。

3. 関わり方への視点

実際の利用者との関わり中で、「慣れ」「思い込み」「発想の転換」「状況把握」「駆け引き」等でも職員意識が重要となると思われる。当たり前と思われる事でも、言葉がけ一つで不信感を持たれてしまう事が多い。統一した声掛けでも信頼関係で受け取り方も違うことを念頭に、過信した対応は禁物である。

自信を持って取り組む事は重要な事であるが、自信・過信が謙虚さを失くしてしまう例が職員に多く、関わりが雑に見られてしまう事がある。ご家族への関わりも同様に、本心を言い当てる事で安心感や・信頼に繋がるが、一つ言い方を間違えると不信感へと変わってしまう。どんなに信頼を得ても一つの言葉で信用を無くしてしまう怖さを知って日々関わる事が重要である。

4. まとめ

個別性を活かして活動を展開する事が重要な中で、集団がまとまるのは難しい事である。利用日のスケジュールの中で苦手な事はあっても、その経験の中から出来る事の幅が広がる事が望まれる。集団の中で「見て欲しい」「構って欲しい」など注目行動をとる方も多く、そこに手を差し伸べる事が必要だと感じた。